

## 終末的希望

——マルコ伝13章——

1965年5月9日  
小池辰雄

靈殿 罷免と救済 終末的希望 言う者は聖靈なり 逆らいの事態 有機体的構造 神の国の  
保証 荒らす憎むべき者 その日その時 実言は実現 神秘の世界

## 【マルコ13・1～37】

<sup>1</sup>イエス宮を出で給うとき、弟子の一人いう『師よ、見給え、これらの石、これらの建造物<sup>たても</sup>、いかに盛んならずや』<sup>2</sup>イエス言い給う『なんじ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずしては石の上に残らじ』

<sup>3</sup>オリブ山にて宮の方に對いて坐し給えるに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ<sup>ひそか</sup>窃に問う、<sup>4</sup>われらに告げ給え、これら的事は何時あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとする時は、如何なる兆あるか』<sup>5</sup>イエス語り出で給う『なんじら人の子に惑わされぬよう心せよ。<sup>6</sup>多くの者わが名を冒し來り「われは夫なり」と言いて多くの人を惑わさん。<sup>7</sup>戦争と戦争の<sup>うわさ</sup>噂と聞くとき懼るな、斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。即ち「民は民に、国は国に逆らいて起たん」また処々に地震あり、饑饉<sup>ききん</sup>あらん、これらは産の苦難<sup>うみ</sup>の始なり。

<sup>9</sup>汝等みずから心せよ、人々なんじらを衆議所に付さん。なんじら会堂に曳かれて打たれ、且わが故によりて、司たち及び王たちの前に立てられん、これは証<sup>あかし</sup>をなさん為なり。<sup>10</sup>斯て福音は先ずもろもろの国人に宣伝<sup>のべつた</sup>えらるべし。<sup>11</sup>人々なんじらを曳きて付さんとき、何を言わんと預じめ思い煩うな、唯<sup>ただ</sup>そのとき授けらることを言え、これ言う者は汝等にあらず聖靈なり。<sup>12</sup>兄弟は兄弟を、父は子を死にわたし、子らは親たちに逆らい立ちて死なしめん。<sup>13</sup>又なんじら我が名の故に凡ての人には憎まれん、然れど終まで耐え忍ぶ者は救わるべし。

<sup>14</sup>「荒らす憎むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば（読むもの悟れ）その時ユダヤにおる者どもは、山に遁れよ。<sup>15</sup>屋の上におる者は、内に下るな。また家の物を取り出さんとて内に入るな。<sup>16</sup>畑におる者どもは上衣<sup>うわき</sup>を取らんとて帰るな。<sup>17</sup>其の日には孕りたる女と、乳を哺<sup>のま</sup>する女とは禍害なるかな。



<sup>18</sup>この事の、冬におこらぬように祈れ、<sup>19</sup>その日は患難の日なればなり。神の万物を造り給いし開闢より今に至るまで、斯る患難はなく、また後にもなからん。<sup>20</sup>主その日を少なくし給わば、救わるる者、一人だになからん。然れど其の選び給いし選民の為に、その日を少なくし給えり。<sup>21</sup>其の時なんじらに「視よ、キリスト此處にあり」「<sup>22</sup>偽キリスト・偽預言者ら起こりて、徵と不思議とを行ひ、為し得べくば、選民をも惑わさんとするなり。<sup>23</sup>汝らは心せよ、預<sup>あらか</sup>じめ之を皆なんじらに告げおくなり。

<sup>24</sup>其の時、その患難ののち、日は暗く、月は光を<sup>はな</sup>発たず。<sup>25</sup>星は空より隕ち、天にある万象、震い動かん。<sup>26</sup>そのとき人々、人の子の大なる<sup>おおい</sup>能力と榮光とをもて、雲に乗り来るを見ん。<sup>27</sup>その時かれは使者たちを遣わして、地の極<sup>はて</sup>より天の極まで、四方より、其の選民をあつめん。

<sup>28</sup>無花果の樹より譬を学べ、その枝すでに柔らかくなりて葉芽めば、夏の近きを知る。<sup>29</sup>斯のごとく此等のことの起ころるを見ば、人の子すでに近づきて門辺にいたるを知れ。<sup>30</sup>誠に汝らに告ぐ、これらの事ことごとく成るまで、今の代は過ぎ<sup>よ</sup>ゆくことなし。<sup>31</sup>天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝くことなし。<sup>32</sup>その日その時を知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給う。<sup>33</sup>心して目を覚まし<sup>お</sup>れ、汝らその時の何時なるかを知らぬ故なり。<sup>34</sup>例え<sup>は</sup>ば家を出づる時その僕どもに權を委ねて、各自の務<sup>つとめ</sup>を定め、更に門守に、目を覚まし<sup>お</sup>れと、命じ置きて遠く旅立ちしたる人のごとし。<sup>35</sup>この故に目を覚まし<sup>お</sup>れ、家の主人の帰るは、夕べか、夜半か、<sup>よなか</sup>鶏<sup>にわとり</sup>鳴くころか、夜明けか、いずれの時なるかを知らねばなり。<sup>36</sup>恐らくは俄に<sup>にわか</sup>帰りて、汝らの眠れるを見ん。<sup>37</sup>わが汝らに告ぐるは、凡ての人に告ぐるなり。目を覚まし<sup>お</sup>れ』

## ●靈殿

<sup>1</sup>イエス宮を出で給うとき、弟子の一人いう『師よ、見給え、これらの石、これらの建造物、いかに盛んならずや』

キリストが宮の境内から出て行かれた。エルサレムの神殿は大きい。これは「<sup>第三神殿</sup>」です。紀元前20年位からヘロデ大王が起工して、かれこれ半世紀もかかつて出来上がったところの大きなものです。

「第二神殿」というのは、エルサレムがバビロニアに陥落させられて荒廃に帰して、その後で紀元前515年に建てたのが第二神殿です。その三番目の神殿です。とにかく非常に豪壮なものですから、弟子の一人が



「先生、ご覧なさい。これらの石はなんと大きな石でしょう。なんたる大きな建物でしょう」

と言つた。高層建築です。ヨーロッパに行きますと、バチカンをはじめ教会堂は実に堂々たるもので、横にもまた縦にも。ロマネスクまたゴチックの建物ですね。ロマネスクの方は横に広い。バチカンはそちらの方です。ケルンのドームはゴチック式です。ギリシャの方へ行けば、パルテノンの大きな神殿もそうです。よくもこんな大きなものをどうやつて建てるんだろうと思うくらいに、本当に摩天楼の——「天を摩する」という。ドイツ語では「雲をひつかく」という言い方ですが——大きな建物で、あれでもつて宗教的な何ものかに威圧されるわけです。その中に入ると、宗教的な雰囲気がおのずからくる。伝統的にそういうようなわけです。もちろん、小さな教会もある。小さいと言つても、こちらよりもだいぶ大きい。田舎に行けば、本当に小さいものもあるけれども。

その代表的な神殿に驚嘆して、そして、

「いと盛んな宗教の姿だ」

と。こちらでも、随分大きなお寺さんがある。仏教にかぎらず、他の新興宗教でも大きな殿堂を造るわけです。しかし、それは本当の宗教の世界とは言えない。いわゆる宗教であつても、真の信仰の世界とはちよつと違う。そのことをキリストは端的に言われたわけです。

<sup>2</sup>イエス言い給う『なんじ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずしては石の上に残らじ』

と。それは一つは、エルサレムの滅亡の預言でもあるわけです。70年にローマの兵火にかかるつて、ダメになつてしまつた。

けれども、神殿宗教は崩壊しても、本当の靈殿は建つ。キリストが復活なされば、もはや不滅の靈殿です。イエス・キリスト自身が活ける神殿として地上を歩いていらつしやつたんですねから。これは靈殿宗教である。キリストのは、いわゆる神殿宗教ではない。もちろん、「神殿」という言葉は、言葉の本来の意味では、靈殿と同じことですけれども。いわゆる建物の神殿ではない。

「神」という字はおもしろい字です。「申」という字は雲形なんです。雲を雷が、電光が貫いている姿がこの「申」です。「示」は、そういういたものが示されたもの、啓示、神示。

だから、「神」は本来、雲を貫いて、電光のごとく臨む。臨み方が電撃作戦だね、神さまは。パウロは正に、キリストの電撃作戦に遭つて、この神の字そのものがパウロには展開したわけです。そういう意味においては、本当の神殿です。雲を突破して、雲霧を突破して、この地上の暗黒を突破して、光が、靈光が臨む姿を「神」というんだから、やはり中国の漢字は素晴らしい。

だから、

「こんなものは壊れてしまうよ」



ト。「しかし、壊れないものがある」ということはおつしやらない。今、この13章でキリストがおつしやろうとしていることは、「終末」ですから、世の終りですから。

### ●審判と救済

<sup>3</sup>オリブ山にて宮の方に對いて坐し給えるに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、  
アンデレひそか窃ひそかに問う、

一番親々のお弟子さんたちが訊たずねた。イエスはオリブ山で神殿の方に向かつて坐つておられる。そういう絵もあるけれども。

<sup>4</sup>われらに告げ給え、これらの事は何時あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとする時は、如何なる兆いかあるか』

「此等の事」というのは、エルサレムを中心とした審判です。

<sup>5</sup>イエス語り出で給う『なんじら人の子に惑わされぬように心せよ。<sup>6</sup>多くの者おかわが名を冒し來り「われは夫それなり」と言いて多くの人を惑わさん。例えば、使徒行伝8章のシモンみたいなやつです。

「われはそれなり」

というのは、原語的な言い方では、

「私である」

という、出エジプト記3章のあのヤーヴェーの

「我在り」

という言い方と同じです。

<sup>7</sup>戦争いくさと戦争うわさの噂うわさとを聞くとき懼おそるな、斯かかる事はあるべきなり、

この「あるべきなり」の「べき」がまた強い「べき」で、

「どうしてもそういうことが起きるぞ」

ということです。イザヤ書19章2節に、

「<sup>2</sup>我エジプト人をたけび勇ましめてエジプト人を攻めしめん。斯まらてかれら各自その兄弟をせめ、おののその隣をせめ、邑は邑をせめ、国はくにを攻むべし。」(イザヤ19・2)

と、こういった戦争が起きるという。

まあ、20世紀の現在、相当、世界の情勢がおかしいですね。

と言う人があるし、また少し先走つている極端な人は、

「世の終りだ」

なんてことを言う人もあるが、そんなことには惑わされなくていい。しかし、とにかく、ある意味において、危機的である。終末的な様相が表れているということは言えるわけです。



我々は、ここに出ているような現実がよく想像できるようなところに今あるわけなんで、今日非常に平穏であるかと思うと、もう明日はそれが火の海に化するということが現代の戦争では、もうお伽話ではなくて現実に来るんですから。恐ろしい現実です。

然れど未だ終にはあらず。<sup>8</sup> 即ち「民は民に、國は國に逆らいて起たん」また処々に地震あり、饑饉あらん、これらは産の苦難の始なり。

これはゼカリヤ書14章のところを見ると、

「<sup>4</sup> その日にはエルサレムの前に當たりて東にあるところの橄欖山の上に彼の足立たん。而して橄欖山その真中より西東に裂けて甚だ大なる谷を成しその山の半は北に半は南に移るべし。<sup>5</sup> 汝らは我が山の谷に逃げいらん。その山の谷はアザルにまで及ぶべし。汝らはユダの王ウジヤの世に地震を避けて逃げしごとくに逃げん。我が神エホバ來りたまわん。諸々の聖者なんじとともになるべし。<sup>6</sup> その日には光明なかるべく輝く者消えうすべし。<sup>7</sup> ここに只一の日あるべし。エホバこれを知りたもう。是は昼にもあらず、夜にもあらず、夕暮の頃に明るくなるべし。<sup>8</sup> その日に活ける水エルサレムより出でその半は東の海にその半は西の海に流れん。夏も冬も然あるべし。<sup>9</sup> エホバ全地の王となりたまわん。その日には只エホバのみ只その御名のみにならん。」（ゼカリヤ14・4～9）

その終末の審判と共に或る一つの終末的な救いの希望も述べられているわけです。まだ、ハガイ書にもあるし、ヨエル書にも出てくるし、エレミヤにも、イザヤにももちろんあるが、預言者はほとんどどれも、終末に関する音信を必ず語つていると言つていい。激しい神の審判はどうしてもそこに世の終りを来たらせるような性格をもつていて。

けれども、神さまは審判せんがために審判するのではなくて、それを大きな救済にもつていく。審判と救済は裏腹をなしている。ですから、終末的審判のあとに、終末的な国、希望が掲げられるわけです。アモスなんていうのはほとんど審判ばかり言つてますが、それでも、チラチラと希望がそこに言われています。

### ●終末的希望

<sup>9</sup>汝等みずから心せよ、

「注意して見てろ」ということです。

人々なんじらを衆議所に付さん。

ユダヤ人の衆議所です。

なんじら会堂に曳かれて打たれ、且わが故によりて、司たち及び王たちの前に立てられん、これは証をなさん為なり。<sup>10</sup> 斯て福音は先ずもろもろの国人に宣伝えらるべし。



この「べし」も強い「べし」です。

そういつた饑饉、地震、戦争というような産みの苦しみがくる。これはみな神さまのなさるところである。審判を、そういう意味において、なさるところのものである。それを招くものは実は人間の方である。神さまは、審こうと思うわけではないけれども。

どういう現実にひっぱり出されましても、クリスチヤンの為すべきことは「証」である。

「福音を宣べ伝えるべし」

ということ。福音の証である。時が迫れば迫るほど、地上に希望がなくなればなくなるほど、世の中が混沌とすればするほど、反対に、気落ちせずして、キリスト者は福音を宣べ伝え、証しなければいかんということです。

「もうどうせ、福音を伝えても、どうにもならんから」

と言つて、閉じこもることはいかん。どんなにそれが実を結ばないよう見えて、言うべきことを言い、為すべきことを為していく。どうでもいいような現実に本当に生きる人が、却つて深く天国を、神の国を希望する人です。終末の希望をもつ人こそ逆に、計算の合わないことをやつていく。この世で算盤そろばんを合わせ、計算を合わせようとする人は、

「もうこの辺でやめた」

と言つて、いい加減で放り出してしまはうわけですが、神の国への終末の希望をもつ人は、どんな現実であつても、誰に認められなくとも、どんなに迫害されても、逆らわれても、福音を伝えていく。かくあらざるを得ない。それが本当の希望をもつ人の在り方なんです。ルターの『卓上語録』の中にも多分あつたと思いますが、

「もし明日、もう世の終りということが分かつたらどうするかと問われたら、私は林檎りんごの苗を植えると答える」

と。そういうような具合に、この地上が崩れていつても——林檎の苗を植えたつて、明日までに実が稔りはしない——結果が絶望的であつても、なお為すべきことを為す。善きことをしていく。そういうところに、この終末的希望を本当に生きる人の実存があるわけです。この世を非常に問題にする人よりも、

「この世はどうでもいい。もう、どうにでもなれ」

と言う人が実は、この世において最も正しい、また激しい生き方をしていく。これが福音を身につけている人の在り方です。

「福音は先ず諸々の国人くにびとに宣べ伝えられるべきである」

と。この「べし」は、

「そうしないではいられないものである、絶対にそうである」

という「べし」です。そうでなかつたら、神の国は来ない。

「神の国は、神の国を来たらせる実存者がいなかつたら、神の国は来ない。おあずけだ」



と、こういうわけです。

### ● 言つ者は聖靈なり

<sup>11</sup>人々なんじらを曳きて付さんとき、何を言わんと預じめ思ひ煩うな、唯そ  
のとき授けらることを言え、これ言う者は汝等にあらず聖靈なり。

「さあ、そうなつたら、何と言おうか。こういう場合には、どういうように出てい  
「こうか」

と、いろいろなケースを考えて準備する。そういうのはこの世の知恵である。普段からし  
つかり行動もせず、普段からしつかり祈りもしないで、

「その時になつたら聖靈が教えてくれる」

なんて、それはいかんですよ。普段の在り方が、即ちいつも聖靈において行動し、聖靈に  
おいてものを言うこと、これがやはり大事です。御靈の事態が身についていれば、その時  
にあわてない。

それはいつも己を棄てた場です。棄私であり、無私である。己というものを棄ててしまう。  
自分を与える。この場合の自分というのは、わが中にあるところのもの、キリストの名によつ  
て歩いているところの、キリストの名を宣言するところの事態です。

「我を否む者は、父の前で我もまた汝らを否む。我を表す者は天国において祝  
福される」

と、キリストは言されました、聖靈が身についているならば、聖靈を宿しているならば、  
何もうろたえることはない。

「汝らの中で語るのは聖靈なり」

というわけです。

どういうところにお勤めをしてましても、いつでも辞表が出せるだけの、辞表を懐に入  
れているだけの気合でもつていかなければ、本当の仕事はできない。「辞表をいつでも出せる」  
ということは、「己を棄てている」という角度です。そのときに、はつきりとしたことが言  
えるわけです。言葉を左右にしない。真理をはつきりと言う。

<sup>12</sup>兄弟は兄弟を、

「クリスチヤンはクリスチヤンを」

と言つたつていい。偽クリスチヤンが本当のクリスチヤンを、正統クリスチヤンが異端と  
しているようなクリスチヤンを。

父は子を死にわたし、子らは親たちに逆らい立ちて死なしめん。

そういうようなことが、そういつた非常な場合には起きてくるという。宗教的ないがみ  
あいというものが昔からありました。



## ● 逆らいの事態

<sup>13</sup>又なんじら我が名の故に凡ての人に憎まれん、然れど終まで耐え忍ぶ者は救わるべし。

マルコ伝13章13節は非常に大事な節です。「耐え忍ぶ」というのはギリシャ語で、「留まりぬく」という字です。終りまで留まりぬく者は、それは救われる。

「我が名の故に凡ての人に憎まれん」

という。キリストの言葉は激しい。昨日まで友だちだと思っていたやつが、自分を憎むということもある。

「ブルータス、お前もか」

というような調子ですよ。

キリストは、全ての者に憎まれたから、こういうことを言われたんです。イエス・キリスト自身が全ての人に憎まれて、弟子からもとうとう棄てられて、独り十字架につかれた。極限の現実をキリストはちゃんと目の前に見ておれる。やがてこれは十字架です。そういう私だと。そういうつた十字架の私を受けとれば、

「私と一緒にこの十字架の側に立つか、然らずか」  
のどつちかなんだ。

「我が名の故に凡ての人に憎まれん」

というのは、

「本当に十字架の側に立つならば、私と同じことになるぞ、凡ての人に憎まれるぞ」ということです。

ところが、キリストを迫害し、背いた人たちが今度はキリストを拝むわけだ。今度は、「キリストはすべての人に拝まれん」

ということになる。

「預言者は、生きているうちは蹴たおされて、死ぬと拝みたおされる」  
なんていう言葉がある。預言者中の最大の預言者キリストは、蹴たおされて、とうとう十字架にかかるが、逆に今度は、拝みたおされる。すべての人になぜ、拝みたおされるか。なぜ、拝まれるか。

すべての人に憎まれながら、すべての人を愛するからです。すべての人を愛する徴がこの十字架なんだ。十字架は、愛の事実なんだ。天上天下ただ一つしかないところの愛の事実なんだ。

「アガペー」

という言葉があるけれども、十字架のアガペーはそんなたやすいアガペーではない。それほどまでに、福音の事態は生まれつきの人間には逆らいの事態なんだ。前に、

「言い逆らいの徴」



というのをやりましたね。

「この子は言い逆らいの徵となる」

と、もうキリストが誕生したときに預言されてしまった。

「クリスチヤンというのは、なんだかとつつきがわるい。考えることがちょっと、現代と妥協しなくて」

なんて、煙つたがられるわけです。一般には、

「文化的キリスト教はいいけれども、原始福音は、原始のキリスト教はちょっと激しすぎて、現代に合うようなキリスト教にすれば、それはいいよ」

というようなわけでしょうが。

けれども、私たちはこの一番生まのイエス・キリストの、また使徒たちが伝えるこの福音の中に水を割らずに入つていく。そうすると、これは躊躇ですから。この激しく躊躇であるところの事態が実は、最も広く包摂するところのものを持つているんです。

けれども、これが分からぬ。これが分からぬで、何か非常に狭隘な福音に、キリスト教に取り違えをする人もあります。それではダメです。また、水を割つたような文化的キリスト教も何もならない。それから、妙に凝り固まつたような、人を審きぬいていくような、そういうパリサイ的なキリスト教は、これはキリスト自身がそのパリサイが大嫌いなんだ。

「すべての人に憎まれん」

というイエス・キリストが逆に今度は、ものすごく激しく一切を包摂していくものを持っているという、この事態です。この福音の性格といいますか、構造といいますか、これが身につかないと本ものにならない。

### ● 有機体的構造

イエス・キリストの言葉を並べてごらんなさい。矛盾する言葉がたくさんある。これは並べてはいかん。それぞの言葉がキリストという驚くべき、把握することのできない鴻大な福音体の構成因子をなして、それぞの役割を果たしている言葉なんです。これを一つぬいてしまうと、それだけ有機体的構造がぬけるようなことです。決して論理的構造でキリストの言葉を解説することはできない。その場に来て、イエス・キリストのその言葉はまさに真理であつて、これをつかめなければ、

「幸いなるかな、柔和なる者」

なんていう言葉がつかめないということです。

「平和ならしめる者」

なんてな言葉がつかめない。「平和ならしめる者」ということを本当につかむとまた、「すべての人に憎まれん」



という言葉がまたつかめる。そういうものです。わかりますか。そういうような質のもので、どうか、皆さんはおそらく受けとつて進んでください。

「そうか、すべての人に憎まれては困るではないか。私はもう少し平和に行きたいんだけれども」

なんて、そういうように比べてしまつたら、このキリストの言葉は矛盾してしまうんだ。

一歩も退くことのできない真理を主張するために、それを守るために、すべての人に憎まれる。私は、たとえば、聖靈のこの事態を、原始の福音の事態を貫いてきたらば、無教会のすべての人に憎まれた。体裁上は、憎んでないような顔をしているけれども、実はみんな私に線を引いている。これは即ち、

「汝らは、我が名の故にすべての人に憎まれん」

ということ。本当にキリストの中に入つてみたば、今まで友だちと思つていたクリスチヤンのすべてから憎まれた。ありがたい。

「イエス・キリストの御言に従つていたら、福音の中に入つてきたら、私もこの13節が少し自分のものになつてまいりました」

と、私は感謝しているわけです。あなた方がその道を一緒に行つてくださるわけです。また、虚心坦懐にこの福音を伝えていけば、真理に対して本当に謙虚な人は、

「そうだ」

と、却つてクリスチヤンでない人が本当の返事をする。しかし、それでも、なかなかその世界までは入つて来ませんけれどもね。

私は結婚式の披露宴のときでも、何かテーブルスピーチをさせれば、まず福音の宣伝から始まる。

「我々のはそちらのとは違う。何も自分をいばるわけではないけれども、キリスト教を取り損なつては困る。今こそ、この文化の一番根底に日本人はこれを受けなくてはいかん」

ということを、私はどの場合でも言つたつもりです。それはやはり、言うべき時に、キリストの御名を隠してはいかん。そうやって、真理に立つて公明に、人々をこの喜びの世界になんとかして入れてあげたいという念願をもつて語るときには必ず響く。

「俺たちは偉いクリスチヤンなんだ」

なんて思つて語つてごらん下さい。決して響かない。反感をきたす。けれども、

「本当に何とかしてこの世界に」

といつて悲願をもつて語るところには、それは響くんです。

「そういうことなら、もつと早くから聞きたかった」

なんてことになつちゃう。



## ● 神の国の保証

「汝ら、我が名の故にすべての人に憎まれん。懼れるな」<sup>おそ</sup>

と。本ものは、まず憎まれる。けれども、それは本当に彼らがその逆らいのあとから、

「悪かつた。いや、これはやつぱり本ものだつた」

と気がつく。

「やつぱり、彼は神の子であつた」

とあの百卒長が言つたでしょ、十字架のキリストを見て。だから、

「いくら憎まれても心配はいらん」

ということ。決して、孤独のための孤独でもない。実は、憎まれながら逆に、真理をもつて相手を支え、相手を担つている。相手を愛している。

終りまで——終末まで、神の国が来るまで、再臨の時まで——耐え忍ぶ。この「終りまで」というのは、究極の意味ではそうですよ、自分の生涯の終りばかりではない。キリストや使徒たちは、もう神の国は間近と思つて語つてゐる。「それはいつだ」ということは分からせんけれども、とにかく迫つてゐるということは間近に感じていた。私たちも呑気な顔をしていてはいかん。神の国の迫りというものを、質的にはいよいよ強く受けとつていく。

「神さま、明日にも新天新地を現象してください」

というような希望を、終末の希望をもつて生きていく。明日にも終末を来たらせるという、この魂のはりです。それは我々の心の中に、魂の中に、胸の中に

「神の国は汝らの中にあり」

という、神の国が来ているから、本当に激しく終末を希望することができる。しかも、あせらない。激しく強く希望しながら、しかも、あせらない。そういうた境地は、いわゆる現実主義でもなければ、いわゆる理想主義でもない。現実も理想も両方ともちゃんと持つてしまふものがこの福音の現実なんです。

だから、天国は既に来ている。来ているんですよ、御靈を持つてゐる人は。そして、神の国はそれが故に、ここに神の国の保証があるから、必ず来ると確信して祈ることができます。希望することができる。单なる願望、空想、瞑想ではない。

だから、終りまで耐え留まるということができる。もし、終りまで忍ぶことができないならば、その人は本当の信を持たず、本当の希望を持たないわけです。

「然れど終まで耐え忍ぶ者は救わるべし」

というのは、私は大好きな句です。どうなつても大丈夫だと。キリストが私たちの中で、御靈と御言をもつて確証してくださつてゐるから、どう思われても大丈夫でござりますと。

「私たちはお互いに、「実存、実存」というようなことを言つて、

「あれはどうも信仰的になつちよらん」

だと、そういうことを言つて人を審いてはいかん。どこまでも、大きくそれを包んで、



「あの人はゆつたりしているけれども、やっぱり、あのゆつたりしている中に本当に凄い力をもつて、自分を救いの世界に引き上げているな、引き寄せているなあ」ということを感ずるような事態になつてくる。そして、

「ああ、あの人は性急に判断して、集会から出て行つてしまつたけれども、まあ、

気長に見てましょう

と。その人はいろんなことにぶつかつて、

「やっぱり、どうも自分はまちがつていた」

と言つて、戻つて来るかもしれないし、戻らなくても、その場所にあつて、とにかく本当のところに立ち帰るために、私たちは祈ることができです。どうけなされて、どうされましても、なおその奥に一番どん底の、また一番高次の世界に私たちは自分をどしどし入れていかなければ、いろいろな事態にぶつかつてグラグラになつてしまふよ。

### ●荒らす憎むべき者

<sup>13</sup>又なんじら我が名の故に

キリストの御名の故に。御名は実ですから、わがこの実名の故に、靈名の故に、

凡ての人に憎まれん、然れど終まで耐え忍ぶ者は救わるべし。

<sup>14</sup>「荒らす憎むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば（読むもの悟れ）

この「荒らす憎むべき者」というのは、ダニエル書9章27節のところに出てくる言葉です。これはアンティオコス・エピファネスというやつのことを、名前を隠してダニエルが書いたわけです。これはゼウスの神を祀つて、ヤーヴェーの信仰をユダヤ人から剥奪しようとしたやつです。

<sup>27</sup>彼一週の間、衆多の者と固く契約を結ばん。而して彼その週の半ばに犠牲と供物を廃せん。また残暴可惡者羽翼の上に立たん。斯てついにその定ま  
れる災害残暴るる者の上に注ぎくだらん。」（ダニエル9・27）

と。ダニエル書というのは黙示文学ですから。9章24節を見ますと、

<sup>24</sup>汝の民と汝の聖邑のために七十週を定めおかる。而して悪を抑え罪を封じ愆を贖い、永遠の義を携え入り、異象と預言を封じ、至聖者に膏を灌がん。<sup>25</sup>汝曉り知るべし、エルサレムを建てなおせという命令の出づるよりメシヤたる君の起ころまでに七週と六十二週あり。その街と石垣とは擾乱の間に建てなおされん。」（ダニエル9・24～25）

と言つて、審判とそのあとの救済のことが、「永遠の義」というような言葉がありましたから、ちよつと今読んでみたわけです。キリストに関わる預言とみていい。

そういう「荒らす憎むべき者」とは、この場合はローマの皇帝のことになる。アンティオコス・エピファネスというのは紀元前168年に偶像をここに建てた。



「荒らす憎むべき者の立つべからざる所に立つを見ば」というのはそのことです。

その時ユダヤにある者どもは、山に遁れよ。

そういう異教的なものがやつてきて、荒らしたらば、

<sup>15</sup>屋の上にある者は、内に下るな。また家の物を取り出さんとて内に入るな。

<sup>16</sup>畠にある者どもは上衣を取らんとて帰るな。

よく、火災や何かで物を取りに戻つて逆に自分が焼け死ぬことがあります。

### ●その日その時

<sup>17</sup>其の日には孕りたる女と、乳を哺<sup>のま</sup>する女とは禍害なるかな。<sup>18</sup>この事の、冬におこらぬように祈れ、<sup>19</sup>その日は患難<sup>なやみ</sup>の日なればなり。神の万物を造り給いし開闢<sup>かいびやく</sup>より今に至るまで、斯る患難はなく、また後にもなからん。<sup>20</sup>主その日を少なくし給わば、救わる者、一人だになからん。

「その日」という字はみんな複数形なので、その患難の禍害の臨んでいる日が長ければ、みんな本当に滅亡してしまうから、それで、

「主その日を少なくし給わば」

と言つたわけです。

然れど其の選び給いし選民の為に、その日を少なくし給えり。<sup>21</sup>其の時なんじらに「視よ、キリスト此處<sup>ここ</sup>にあり」「視よ、彼處<sup>かしこ</sup>にあり」と言う者ありとも信すな。<sup>22</sup>偽<sup>にせ</sup>キリスト・偽預言者<sup>にせよくごんしゃ</sup>ら起こりて、徵と不思議とを行い、まじわざ的なことをやるわけです。

為し得べくば、選民をも惑わさんとするなり。<sup>23</sup>汝らは心せよ、預<sup>あらか</sup>じめ之を皆なんじらに告げおくなり。

<sup>24</sup>其の時、その患難ののち、日は暗く、月は光を<sup>はな</sup>発たず。

これはエレミヤ記4章にも同じようなことが書いてある。また、イザヤ書13章にも。<sup>25</sup>星は空より隕<sup>お</sup>ち、天にある万象、震い動かん。

これはペテロ書にも出てます。

<sup>26</sup>そのとき人々、人の子の大なる能力と榮光とをもて、

これはダニエル書7章12、13節のところです。

雲に乗り来るを見ん。<sup>27</sup>その時かれは使者<sup>つかい</sup>たちを遣<sup>つか</sup>わして、地の極<sup>はて</sup>より天の極まで、四方より、其の選民をあつめん。

世は混沌としてくると、そういうたいわゆるデモーニッショな人物が働きだして、とやかくいろいろなことを言いだす。

いろいろな現実を、火の下、水の荒れ狂う中をなお突破して、神の国を新しくそこに現



することのできる生命力は正に靈生である。靈生的なキリスト者、キリストの靈に生きるところの、御靈に生きるところのキリスト者です。私たちがいつもその生命を本ものにするために必要な要素は、ただこの祈りと、それから御言をしつかり身につけていること。聖書の言葉を祈りをもつて真に身につけている。このことです。そのときには、惑わしに合わない。

しかし、ここにかかるところの驚くべき現実の前兆的なものは、こないだの広島や長崎における原子爆弾のかの事態や、それから、いろいろな空襲で非常に悲惨な事態に、私たちは出つくわしてきたわけです。昨日も、或る人とお話した。その人はちょうどあの広島の原爆の全くその前夜に、

「一家を携えて東京の方に出てきた。これは何もそんなことは知らないで、とにかく出てきた。親戚の者はみんな参っちゃつた。私たちだけ助かつた」と。それから、そのことを聞いて大急ぎで引き返したら、まあ本当に今でも目にちらつくような恐ろしい現実だつたということをつぶさに聞きました。

普通の生活でも、非常に忙しくて疲れてしまつたり、いろいろな仕事上のことで躊躇をきたしたり、あるいは対人関係で妙なことになつてみたり、いろいろなことが我々の現実にはあるわけです。

けれども、どうか、そういういろいろな試みや何かに出つくわしたときに、私たちが決して、その環境や条件というものによって因果関係で何かものを考えて判断して、それからその先をどうやつていこうなんていうようなことではなくて、いつも、そういういた事態は、神さまが私たち一人ひとりをそのような事態を通して、本当にキリストの靈生に追いやり、キリストの靈生の実存者として鍛えて上げてくださつてているという、この一点をしつかりと自分の身に、魂に置いて、そして進んで行くことです。

それをしなかつたならば、どんなに善さそうでも、決して本当の神の民とはならない。これをやつていけば、いろんなことに出つくわせば出つくわすほど、その人は本当に鍛え上げられていく。

「難難汝を玉にす」

と言ふけれども、本当に靈玉となしていく。

「一切のことは私たちに働きて善となる」

とは、「聖となる」と言つてもいい。一切のことは働いて私たちを聖徒としていく。キリストの聖徒としていく。神の恵みが、サタンの働きの奥に、最後になおキリストの働きがいつも来ている。それを信じ、つかまえぬき、つかまえられぬいて行こうと。これが本当に、「終りまで留まりぬく」

という、キリストのもとに留まりぬく、聖靈を宿しぬくということです。キリストがここでおつしやつてあるところの、終末的な審判の、天地がひっくり返るような現実が来まし



ても、その時に私たちが本当にその現実をもう一つ奥の、もう一つ高い現実において、これに処していくことができる。そういうクリスチヤンでありたい。そのためには、日常の現実において、いつも質がそのように鍛えられていくのでなかつたならば、とうてい非常の時に処していくわけにいかない。そのためには、どこまでも、常に祈りを深くしていくことです。

### ● 実言は実現

<sup>28</sup>無花果の樹より<sup>29</sup>譬<sup>たとえ</sup>を学べ、その枝すでに柔らかくなりて葉芽めば、夏の近きを知る。<sup>30</sup>斯のごとく此等のことの起ころを見ば、人の子すでに近づきて門辺にいたるを知れ。<sup>31</sup>誠に汝らに告ぐ、これらの事ことごとく成るまで、今の代は過ぎ逝<sup>ゆ</sup>くことなし。天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝くことなし。

「天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝くことなし」

と。「御言は過ぎ逝くことなし」ということは、

「御言は必ず実現する」

ということです。

「神さまの言は真理として観念的にただいつまでもある」ということではない。

「我が言は移ろつていかないで、それが必ず実現していく」ということ。この実言は実現する。キリストの言は空言でない、実言だから、これは実現する。聖書の言葉がそのような実力をもつた実現の実言ですから。プロテスタントでは、

「御言、御言」

とよく言うが、ただ勿体ぶつているのではない。聖書の言葉は、読めばそれが直ちにわがうちに実現しなかつたら、御言は読んでやしない。必ず実現していなくては。そして、それが相対的現実においても、時あつてか実現するだけのはなしだ。深い現実では、聖書を読めば直ちに、わがうちにその現実は開示してくる。それでなければ、言葉は食らつていいない。

「言葉を食らう」

とは、その言葉の事態が自分の魂の中で現象している、現実となつているということです。

「終りまで耐え忍ぶ者は救わるべし」

というのを、

「終りまで、さて、私は果たして耐え忍ぶでしょうか」

なんて思つてゐるのは、それは聞いてない、読んでない。

「終りまで耐え忍ぶ者は」



と言うときに、

「私は終りまで耐え忍ぶ者である。キリストの御靈によつて、靈生によつて、私は終りまで耐え忍ばないではいられません。そういう者でござります」

ということをはつきり、キリストのご恩寵の故に言えていなければ、これは読めていない。そこでなかつたら、この言葉は力とならない。

「はあ、終りまで耐え忍ぶとは、どうしようかな」

なんてでは。また、大いに意気込んで、いわゆる人間的な意気込みで、

「終りまで耐え忍ぶぞ」

なんて言つて一生懸命で讃美歌を歌つていて、この集会からさつきつと逃げて行つた人もある。そういう、人間的な決意とか、そんなものは当てになりません。問題は、この御言が祈りの世界で、御靈の世界で自分のうちに事実となつてゐるかということです。そしたらば、必ずそくなつていく。

「祈りたることは聴かれたとせよ」

ということは、

「祈つたことを既に事実とせよ。そうすれば、実現していくぞ」ということです。神さまは、自分を棄身で祈つていく人を決して棄てない。皆さん、どうですか。そういう意味で、本当に私たちは幸いな現実の中にある。

「天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝かじ」

「我が言の成る天地は来るぞ」ということです。

「いわゆる天地は過ぎゆく。罪の世の天地は過ぎゆくだろうが、我が言の天地、新天新地は成つていく。汝らのうちに既に新天新地があるではないか」

と。これはいわゆる現実主義でもなく、いわゆる理想主義でもない。私たちの中に本当の現実と本当の理想が現象してゐるわけだ。本当の終末の希望が希望として、最も輝かしい希望を私たちは持つてゐる。だから、クリスチヤンの顔は何ものよりも輝かしくあるべきです。

キリストは十字架にかかつて、悲しみの人にして悩みを知れりという。昔は、無教会で私が教わつた頃は、

「十字架、十字架」

と言つて、悲哀ということが何かひとつクリスチヤンの大重要な要素みたいだつた。本当の悲しみは、神さまと共に——呻きのよう、深い悲しみと言いますか——それは持つていますよ。しかし、それが持てるのは、それにはるかに勝るところの素晴らしい輝きの世界、天国を持つてゐるからです。

「今日、汝、我と共にパラダイスにあり」



と言う。どんなにみすぼらしく見えて、どんなに行き詰まつたように見えて、  
「一切の秘訣を得たり」  
というのは、

「現にパラダイスにあり」

ということです。泣いている顔の奥に、実は水の如き輝きを持つてゐる。それが本当のクリスチャンだ。それは御靈が来なければ、この勝利といふものは——これは決定的勝利です——この勝利は来ない。どうか、これからまた一週間もそのつもりで、本当の輝きをもつて進んで行きましょう。

### ●神秘の世界

<sup>32</sup>その日その時を知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給う。

「ただ父のみ知り給う」と言う。だから、いい加減な預言なんていうものに惑わされることはない。

こないだ私のところに、知らない人から、

「あなたはお分かりですか。来年の9月は世界の終りですよ」

なんて、とんでもない手紙が来た。私は返事も書かない。

世界の終りはいつでも来ますよ。神さまが、これを来させようと思つたら、いつでも来る。祈りの世界では、或る時が危機というようなことは示されるでしよう。けれども、キリストも使徒たちもそのことを間近に見ながら、神さまの方ではその計画を変えなさつたわけです。だから、軽々しくそういうような時期的な預言なんかはするものではない。イエス・キリストも間近と思いましたが、しかし、最後的なことにおいては、

「父のみぞ知りたもう」

と言われた。

<sup>33</sup>心して目を覚ましおれ、

大事なことは、目を覚ましていること。

汝らその時の何時なるかを知らぬ故なり。

「盗人のごとく来る」なんて、別なところで書いてある。

<sup>34</sup>例え家を出づる時その僕どもに権を委ねて、各自の務を定め、更に門守に、目を覚ましおれと、命じ置きて遠く旅立ちしたる人のごとし。<sup>35</sup>この故に目を覚ましおれ、家の主人の帰るは、夕べか、夜半か、鶏鳴くころか、夜明けか、いずれの時なるかを知らねばなり。<sup>36</sup>恐らくは俄に帰りて、汝らの眼れるを見ん。<sup>37</sup>わが汝らに告ぐるは、凡ての人に告ぐるなり。目を覚ましおれ

私は今朝は朝四時に起きて、伊東の海岸に立つて——静かだつたなあ——海辺で祈つて



きた。ちょうど中学一年のとき、伊豆の伊東で夏を過ごした時に、夜明けに金環食を——お天道さんが日食を起こしてそれが金の環になつた——それを見たことを、今朝も想いだした。太平洋の波と、大洋と共に——本当に静かな海だったからね、渚もほとんど波の音がしないくらいです、サラサラ、サラサラと——何か非常に深い、ちょっと不思議な祈りの境地に入れられて、感謝しております。イエス・キリストと大自然は祈っているなあと思った。パウロが、

「万のものが呻いて祈つている」

とローマ書 8 章に書いていますが、正にそのようなわけです。しかも、大洋は、呻きばかりでなくて、何か非常に深い力強さを持つている。

神の世界は、さつきの「神」という字が雷でしたが、正に雷なんだ。もの凄い電光と共に、実に静かな神秘の世界です。祈りの世界で、私たちは、キリストの御言が祈りにおいて深く——もう解釈ではない——身につかなかつたら、聖書の研究なんかいくらやつたつてダメです。どうか、皆さんは本当に祈り深い人になつていただきたいと思います。

それが、

「目を覚ましおれ」

ということ。ただ目を覚まして、徹夜することではない。祈りをもつて、祈り心であるということが、「目を覚ましている」ということ。心の目は祈りである。その点で、私が育つてきた無教会は祈りが足りなかつたね。集会では、みんな立派な祈りはするんだ。けれども、本当の意味においての祈りの世界は、どうでしょうか。この頃書いているものを見ると、聖霊のことをちょこちょこ言つているけれども、聖霊のバプテスマということが我々の信仰の大事なものであつて、これがなかつたならば成り立たないというところまではつきり誰も言わん。

どうか、皆さんは、大事な福音の世界に今、進みつつあるのですから、一切のものに棄てられようが、終りまでキリストと共に耐え抜き——本当に耐え抜けるんですよ——勝利の生涯を進んでください。このマルコ伝 13 章は、何か終末的現実で、世の終りみたいなことが書いてあつて、縁遠いような何かちょっと妙な話のようだけれども。20世紀の現在というものが決して安閑たるものではない。サタン的な要素がいろいろ働いている。キリスト教国といえどもダメです。

私たちはイエスと共に、使徒たちと共に、そのような現実を突破できるところのキリスト者として、どこまでもキリストの御名を拒まず、はつきりとものを言う。そして、天地は過ぎゆくけれども、神の国は実現する。御言の事態は、聖書の事態は実現する。実に、我がうちに実現しつつあるということを喜び受けとりながら、本当に輝かしい、絶対の勝利をいただいて進んで行こうというわけです。

